

日本キリスト教会 大阪北教会

2016年6月26日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書 11章 17～27節

17 さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどの所にあった。19 マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。21 マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。22 しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」23 イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、24 マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。25 イエスは言われた。「私は復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」27 マルタは言った。「はい、主よ。あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると、私は信じております。」

《説教》 『わたしを信じる者は死んでも生きる』

◆今日は、わたしたち大阪北教会がかねて準備をしておきましたチャリティーバザーの日であります。今日は、初めてお会いする顔も見えるのですけれども、ようこそお出でになりました。バザーは正午から3時までですが、気持ちは早やそちらにいつているかもしれませんが、その前に一緒に聖書を読み、神様を礼拝いたしたく思います。

◆実は、わたしは昨晚、本当にわくわくしながら過ごしました。それは今日の聖書の箇所を読んでという事が第一のことですが、それと共に、昨晚8時半ごろでしたか、日本陸上競技選手権大会の男子100メートルの決勝があったのです。私も若い頃は陸上短距離の選手だったということもあるのですが、昨日は特に日本人が初めて10秒を切って、9秒台の記録を作るかどうかということだったのです。結局10秒を切ることはできませんでした。10秒切りは、8月のリオのオリンピックに持ち越しになりました。本命視されていた、桐生でも、山縣でもなく、ケンブリッジ・飛鳥という、お父さんがジャマイカ人の選手が優勝しました。

◆ところで、今日の聖書の話とこの陸上競技とを結びつける言葉が、今日の箇所にあります。18節に、「ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどの所にあった」とあります。わたしたちは、今では「メートル法」になれていますから、「十五スタディオン」と言われても、距離感がつかめませんが、「一スタディオン」は「185メートル」になります。ですから、「十五スタディオン」は約3キロになります。それにもうひとつ、この「スタディオン」から、「スタジアム」＝「競技場」という言葉が派生しています。そして「スタディオン」＝「185メートル」が、今日の全世界の競技場の基準、「1周400メートル」の基になっているのです。

◆さて、「エルサレムから十五スタディオン」と云えば、3キロ弱です。エルサレムから歩いて

3～40分の距離です。そこの「ベタニア」という村に、今日のラザロという人とマルタ・マアアの3姉弟が住んでいたわけですね。そこへイエス様が来られたのです。今日の箇所を始めにこうあります。「さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。」「墓に葬られて既に四日」とあります。日本もかつては土葬でしたが、今は火葬してからお骨を墓に納めます。けれどもイエス様の国では「土葬」というよりも、横穴式の墓に遺体をそのまま納めるのです。そして「墓に葬られて既に四日もたっていた」ということは、既に死臭が漂っていると云うことになります。

◆イエス様は少なくとも年に3回は必ずエルサレムに祭りのために上られました。その行き帰りにいつの頃からか、この3姉弟の家に立ち寄られるようになります。そして、この3姉弟をイエス様は心底愛しておられました。そして3姉弟も、イエス様を心から愛し、頼みにしていました。「エルサレムから3キロ弱」ということは、「エルサレムに近い」ということなのです。そのエルサレムに近づくということは、それは当時の状況からすれば、「死地に赴く」ということでした。「死を覚悟で、エルサレムに向かわれた」ということなのです。これはキリストにとっては命がけのエルサレム行だったのです。

◆今日の箇所は短いのですが、意味深長です。それで、今日、どうしても心に留めていただいて、折に触れ思い出していただきたい言葉は「ラザロ」という名前と「スタディオン」という言葉です。実は「ラザロ」という名前ですが、聖書に出てくる名前はどれも本当に意義深いのですが、「ラザロ」という名前には、「神、救い給えり」という意味があります。「神様が救って下さった」という意味であります。それと同時に、「神が救い給う」という含みを持ちます。神様は過去になされたことを今もなさってください。これからもなさってください。そういう意味が、この「ラザロ」という名に込められています。そして、「スタディオン」です。「エルサレムに近く、十五スタディオン」です。これは先程申しましたように、エルサレムに向かうということは、主イエス・キリストにとって、ラザロを救う為には「いかなる犠牲をも厭わない」という不退転の決意の、エルサレム行なのです。

◆少し先になります。38節以下にこのようにあります。「11:38 イエスは、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。11:39 イエスが、『その石を取りのけなさい』と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、『主よ、四日もたっていますから、もうにおいます』と言った。11:40 イエスは、『もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか』と言われた。11:41 人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。『父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。11:42 わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。』11:43 こう言ってから、『ラザロ、出て来なさい』と大声で叫ばれた。11:44 すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。」

◆ですから皆さん是非、このヨハネによる福音書11章全体をずーっと読んでいただきたいと思

います。それと「ラザロ」＝「神、救い給えり」という名前です。聖書という書物は、神の救いを受けた人たちの物語集なのです。聖書には実に多様なことが記されています。しかし、「神が救ってくださった」という事の証しというか、証言集と言いますか、そういうことが記されているのがこの聖書という書物なんですね。そして先程来、申しましたように、エルサレムに近づくということは、キリストにとっては命を失うということに近づくことになるのですね。どうしてかという、当時のユダヤ教当局者たちにとって、イエス・キリストが神と自分を同一視することは、許しがたい神冒瀆で、石打の死刑に値する罪です。また、キリストは、ユダヤ人たちが本当に真剣に守ってきた神様の教え、掟を破る、とんでもない男である。こんな男を野放しにしておくことは、神の為にも、人々の為にもならないとして、その命を狙っていたからです。そして、本当に殺されかけたのです。

◆キリストは、今は神の定められた時にあらずとして、もう一つの、北の方のベタニアに退いておられたのですが、今、そこからエルサレムに近いベタニアに来られるというのは命がけなのです。ここから、ラザロという名前とエルサレムから十五スタディオンのベタニアにイエス様が来られたということは、キリストという方は本当に文字通り、自分の存在をかけて、命をかけて、どんな不遇の中にあろうが、死んで4日経っていようが、キリストは自分の命に代えて、その人を必ず助ける、救うという思いを持たれる方であり、そしてそれをやり遂げて下さる方、それがイエス・キリストという方であり、その実例の一つが、このラザロ物語なのです。

◆今日は既に2つのキーワードのことを申し上げましたから、ここでお話を終えても良いのですが、1つは「ラザロ」という名前、意味は「神、救い給えり」でした。それから、「スタディオン」＝185メートル。そういうことで、このベタニアに近づくことは命がけなのです。話はまだいろいろあるのですが、本当は、マルタとマリアは「ラザロが死なない内に、イエス様早く助けに来てください」と、急ぎの使いをやるのですね。ところが、イエス様はすぐには来てくださらなくて、来られた時には、既に死んで4日経っていたのです。マルタもマリアも、「主よ、あなたがもしここにいてくださったらわたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言っています。「後のまつり」という気持ちもあるのでしょうか。

◆けれども、22節で「しかしあなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」と、マルタは言います。主イエス様に対する信頼は揺らいでいないわけですね。23節以下。「23 イエスが、『あなたの兄弟は復活する』と言われると、24 マルタは、『終わりの日の復活の時に復活することは存じております』と言った。25 イエスは言われた。『私は復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』27 マルタは言った。『はい、主よ。あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると、私は信じております』。

マルタの主イエスに対する信頼は、ほとんど絶対であります。しかし、主イエスご自身の理解と、マルタの理解では、雲泥の差があります。まさか、ラザロが実際に甦るとは、マルタは想像さえしておりません。一般のユダヤ人がそう信じていたように、終わりの日の復活の事は信

じていたのですが、死んで既に4日経ち、腐臭を放つラザロが、今・ここで復活することは、マルタにとって、そして、誰にとっても、全く想像さえできないことであります。

◆「25 イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』
27 マルタは言った。『はい、主よ。あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると、私は信じております。』」 マルタは主イエスの御人格が格別であることは信じていますが、それでも、主イエスの言われることと、それに対してマルタが答えていることでは、その理解においては越えがたい障壁、越えがたい溝があるのです。主イエスの言われることは、ご自身において「終わりの日の復活」が、現に到来していることを、言っておられるのですが、マルタは、その事に思い及ぶことはできないのです。マルタもマリアも、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と訴えております。主イエス・キリストが、死なないこと以上の事を為して下さることには思い及ばなかつたのです。神様が、主イエス様が、私たちの為になさって下さる事に、遅すぎるという事は決してありません。しかも、わたしたちが、これが最良と思う事を、はるかに越えた善きことを為さってくださいなのです。

◆今日はこの後チャリティーバザーがありますので、お話はここまでと致しますが、ご自分で、このヨハネによる福音書11章全体を味わってください。無限に豊かな恵みに与れると思います。イエス・キリストを信じることに優る幸いはありません。イエス・キリストを信じる時、わたしたちは、死んでも死なない命、そして、決して死なない命を、今・ここで生き始めるのです。

◆わたし達は、今日の礼拝のはじめの所で、詩編第103篇1節～5節を交読しました。〈わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって、聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを、何ひとつ忘れてはならない。主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください〉と。わたしたちが信じている神様は、ここに交読した内容のすべてを、叶えて下さる御方なのです。この御方を信頼し、一切のことを、この神様の御手にお委ねするのが「信仰」です。そして、この信頼、信仰は決して裏切られることはありません。

◆お祈りいたします

憐み深い、愛に満ち給う主イエス・キリストの父なる神様

あなたのわたしたちに為さってくださいなことは、わたしたちの思いをはるかに超えて恵みと愛と憐みに満ちております。どうかこの聖書を通してわたしたちがいつそあなたに近づくことができますように。そしてあなたを信じることができる幸いへと導き入れて下さい。今日この後チャリティーバザーを致します。皆で善き時を持つことができるようにさせて下さい。この祈り、主イエス・キリストの御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。